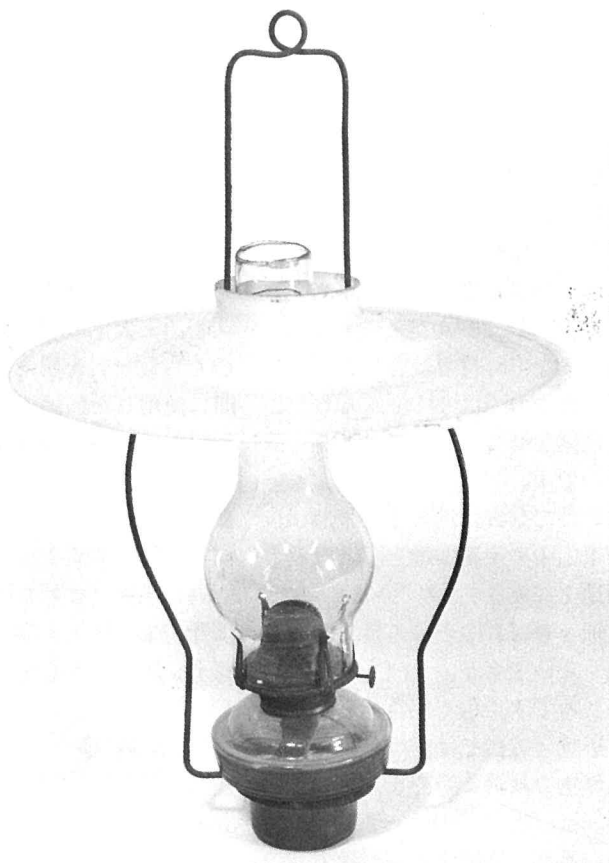


民俗博物館だより

Vol. Ⅸ No. 1

1987. 10. 30



目 次

奈良県100年記念展

「明治・大正・昭和生活資料展」と催しもの 1

照 明 具 (生活資料展示特集) 3

子供とまつり (大和の年中行事④) 5

奥吉野の民俗採集報告二題 7

1. 天川村老博労の話

2. 旧高見村木津泉ヒデ嫗聞書

民俗公園だより 11

「明治・大正・昭和生活資料展」と催しもの

江戸時代までは、大和国と呼ばれており、それが奈良県と呼ばれるようになったのは明治4年（1871）の廃藩置県の時でした。その後、堺県・大阪府を経て、再び奈良県と呼ばれるようになったのは明治20年（1887）11月4日でした。今年はその年からかぞえて丁度100年目を迎えることになったわけです。

奈良県は面積が3,692.11㎡で全国的にみても小県（40番目）です。東西に約64km、南北に約102kmのだ円形で、周囲に海のない県です。奈良県の昭和10年における市町村数は1市28町122村でした。今日では9市21町17村となっています。人口にしても明治4年当時418,326人ですが、今日1,289,078人にもなっています。このような市町村の統合や人口の増加は単純になりたつのではなく、くらし、経済、交通などの複雑な結びつきが基本となって変化してきたのです。

奈良県は大きくわけて奈良盆地とその東部にある高原地帯の東山中や宇陀山地と、吉野川から南の吉野山地とにみることができます。その中で、奈良盆地と呼ばれるところは、面積が奈良県の2割ぐらいますが、人口も村落数も密度の濃いところでは、古くから進んだ農業地帯であり、近世・近代では反当りの収穫高の増加や商品作物の栽培に労力をおしめ投入しました。

一方、奈良県の一番南に位置する吉野地方は奈良県の約5割を占める険阻な山岳地帯です。その山間に村落が点在しています。この地域は民家の周囲に若干の田畑を作りながら林業とそれに関連した生業にたずさわる場合が多かったところでは、このように、奈良県というところは大きくわけて、進んだ農業地域と、そして林業地域が存在しているのです。

さて、民俗博物館は、昭和49年にオープンして以来、上記の地域から民俗資料つまり庶民の生活資料を収集・保存して今日2万点近く収集しています。これらの資料は人々のくらしの推移の理解に欠くことができないもの

です。人々のくらしというのはすべての文化の基盤をなすものです。私達の庶民生活の過去（歴史）をふりかえる時には民俗資料は重要な資料になります。むかし使った運搬具やはきものをみるとそこには庶民の歴史を見ることができるのです。庶民のこのような歴史は多くの場合気付かぬままに衰亡、消滅したり、あるいは変化したりします。特に戦後の急激な変化は、そのくらしぶりを基本的に変質させてきました。

奈良県となって100年目をむかえようとする今年は、民俗文化財を通して歴史をふりかえる大切な節目であると思い、当館において「明治・大正・昭和生活資料展—ムラとイエのくらし—」を開催しています。この100年間に使用した庶民の生活資料をたくさん展示しており、当時の人々の考え方やその姿に思いをはせていただく機会になればと思っています。近代化という名のもとにすてきだった伝統的な風俗習慣や民具をいま一度当時の人々と同じ感覚（きもち）を持ち理解することにより、より郷土を深く認識し、郷土を愛し、郷土を創造する心を養うきっかけになればと願っています。

展 示 内 容

① 奈良県のくらしと近代

奈良県の風土と環境

奈良県のくらしと近代

② ムラのくらし—かんがい・運搬・交通・交易—

奈良盆地のムラ

—水と生活、かんがい用具—

吉野山地のムラ—交通と運搬用具—

マチのくらし—交易用具—

③ イエのくらし —イエのくらしとあかりの変遷—

イエのくらし—台所とカマド—

あかりの変遷

④ ムラとイエのくらし(1) —子供の世界—

子供の成長

子供とあそび

ムラと子供—子供組—

一人前

近代教育制度の始まり

⑤ ムラとイエのくらし(2)

ームラ・イエのいとなみと先祖をまつる風習ー

ムラ・イエのいとなみームラの構造ー

ムラのまつりー祭礼ー

先祖をまつる風習

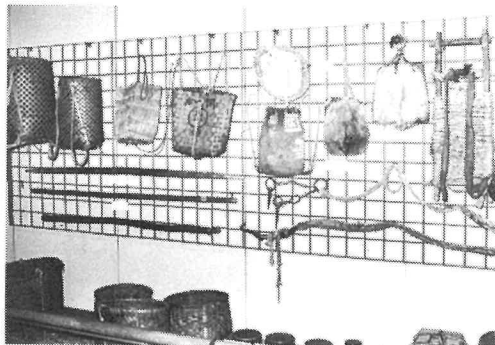
先祖まつりの風習にみる念仏講

郷土と先祖まつり

■ 奈良県100年記念の催しもの

奈良県100年の記念的な催しものとして、常に当館では地に足のついた生活の側面から追求しています。その一つに体験学習講座を企画し、毎月一回実施しています。幸い当館の周囲は大和民俗公園がありその中に生活の拠点となった民家も復原されており、民家を使ったむかしなつかしいたべものシリーズとあそびシリーズを行っています。参加者も多く充実した体験学習となっていると確信しています。民家のカマドを使ってむかしながらのたべものを作りその味を知り五感すべて働かせて歴史を学んでもらうつもりです。六月にはチマキづくり 七月には小麦餅づくり 八月は親と子のむかしのあそびなどすでに実施して好評でした。後半の予定は別表の通りです。

また、秋の期間に「明治・大正・昭和生
活資料展」の特別講演会を開催する予定です。
生活の側面から近代のうつりかわりをそれぞ
れの専門の先生方にお話をさせていただくつ
もりです。



▲ムラのくらしーかんがい・運搬・交通・交易ー
(吉野山地のムラー交通と運搬用具)
のコーナー

多数ご聴講をおねがいいたします。

私達は今を考える時には常に過去に目を向
けなければなりません。その過去に目を向け
る時には常にその過去を知り得る資料を通し
てのみだけ語ることができるのです。庶民の
過去をみようとする時、文字や工芸品からで
はとても見ることはできません。庶民が日常
生活に使った用具や伝統的な習慣が大切な資
料となります。今日急激に変化する社会にと
って、このような民具や伝承資料は大切に保
存しておかなければならないように思います。

(文責 浦西)

■ 奈良県100年記念事業

「明治・大正・昭和生
活資料展」の展示は
昭和63年6月30日まで

特別展講演 くらしのうつりかわり100年(定員80名)

年・月・日	テ ー マ	講 師
62.10.24(土)	奈良県の100年ー民俗社会の変貌ー 〔列品解説〕収蔵資料からの再発見	国立民族学博物館 国内資料調査委員 福田栄治 当館主任学芸員 大宮守人
10.31(土)	奈良盆地と吉野山地のムラと人々 〔列品解説〕ムラの景観	八代学院大学教授 林 宏 当館主任学芸員 浦西 勲
11.14(土)	イエのくらしー日常生活のうつりかわりー 〔列品解説〕やまとの仕事着	花園大学助教授 芳井敬郎 当館主任学芸員 徳田陽子
11.21(土)	ムラとイエのくらしー祖先を祀るー 〔列品解説〕八島の六斎念仏	帝塚山短期大学教授 赤田光男 当館主任学芸員 大宮守人
11.28(土)	子供の世界 〔列品解説〕矢田原の子供ネハン	八代学院大学教授 林 宏 当館学芸員 横山浩子

〔場 所〕当館講義室 〔時 間〕午後2時～4時(受付は1時から)

体験学習ーむかしのたべものシリーズー(定員50名)

62.11.8(田)	クルミ(大豆)モチづくり	城 野 賢 輝他
12.13(田)	モチツキとシメナワづくり	城 野 賢 輝他 久 保 輝 保
63.2.7(田)	トチモチづくり	松 浦 茂 広
3.6(田)	ヨモギダンゴづくり	城 野 賢 輝他

〔場 所〕当館講義室集合後、民家にて 〔時 間〕午後1時～4時
〔申込方法〕催し日の10日前から電話にて受付です。ただし定員になりし
だい締め切ります。 〔参加費用〕入館料のみ



▲イエのくらし(一台所とカマドーのコーナー)

照明具

大宮守人

●はじめに

室内における照明具の変遷は仕事場や生活空間の使われ方の変化にも大きな影響を与えたといえましょう。「明治・大正・昭和 생활資料展」展示資料の中から特色あるいくつかの明かりの用具を取り上げてみましょう。

●松 燈 台

輪切りの木台に鉄皿付きの鉄釘を突立てたようなこの照明具は、写真(1)奥吉野地方の山村で明治～大正頃までまだ盛んに夜なべ仕事などに使われていた照明具です。

これの照明用具たる所以は手元のあかりを得るために都合のよい鉄皿の高さにあります。高さ37～40cm程に作られ多くは皿の中央部には取手のような金具が付いています。この上に松のジン（赤身で油分の多い松の芯材）を小割りにしたものを乗せ、小さな焚火をして手元のあかりとしたのです。取手のような金具に燃料を横たえと空気の通りも良くなるという仕掛けでしょう。

素朴な器具ですが土地に密着した人々のくらしぶりが窺えます。

燃料である松のジン（コエマツともいう）は、風倒木やその株が腐って芯材だけになっ

たものを山で探し、平素から備蓄に努力していたということです。また鉄皿には、前挽鋸（材木を板に挽く身幅の広い鋸）や鋤、スコップなどの古手をとっておき、鍛冶屋に加工してもらいました。この明かりは黒い煤が著しかったようですが、多少の労力にかかるが身近にある燃料や、鉄の廃物利用など金銭のかからぬのがなにより大事という昔の山村のくらしぶりがしのばれる貴重な資料です。

●瓦 燈

これも素朴な燈火具の一つです。角張った酒徳利のような形をしたこの器は主に菜種油を日常の燈油としていた時代の燈火具の中でも質素なものの1つです。写真(2)

器の胴には石燈籠の火袋のような大きな窓があり、その中へ燈芯を横たえた油皿を入れるようになっています。中の煙は徳利の口のような部分から上へ貫けます。この口は、何か手仕事をする時には油皿を乗せて燈台となります。風のある時や就寝時には油皿を中に入れるという使い方です。窓の右側角の上下には蝶番受けがあり元は和紙を張った鉄棒様の扉が付属したようで、石燈籠の火袋とよく似た姿です。



▲（写真1）松燈台



▲（写真2）瓦 燈

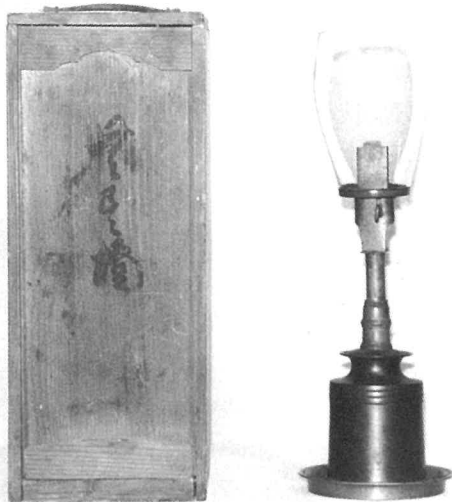
●無 尽 燈

これは菜種油を使用する照明具の中の最高傑作といえるでしょう。幕末に「からくり儀右衛門田中久重」が發明（當時は京都に在住）し販売した「無尽燈」です。粘性の強い菜種油を石油ランプと同じように垂直に高い位置まで上げて燃焼させるのに、圧搾ポンプを支柱の中へ仕込み、空気圧によって油溜りの菜種油を上部の燃焼部に押し上げる仕組みになっています。上部には、ガラスコップの底を貫いて取付けたようなホヤがあり、あたかも洋燈と見がうような姿をしています。

この燈火具は、行燈が主なあかりであった頃の日本人の洋燈に対する憧れ、好奇心が作りだした珍品といえましょう。燃焼の原理は、菜種油を使う関係上、燈明皿の域を出るものではないといわれています。石油という新時代の燃料を手に入れることが出来ない日本人が苦心の末作りだした洋燈によく似た器具、それが無尽燈なのです。好奇心旺盛な当時の人々の一面が窺えるようではほえましい資料です。

●カンテラ

携帯用の洋燈のことをいうのですが、小型の裸火で使うものを指す場合が多いようです。これには、ガラスのホヤはなく、直径6 cm程の円筒型の罐に直径5 mm程の紐のような芯を上下させる簡単な機構を取付けたもので、風



▲（写真3）無尽燈

呂場や炊事場での簡素なあかりとして、また、油皿に替わり行燈の燃焼具としても使われました。

●小 燈

これはホヤ付きの洋燈としては大変素朴なものの一つです。ホヤは油壺の口に直に重なっており、燈芯を上下させるツマミはホヤの中に隠れています。また、燃焼空気を取り入れはホヤとガラスの油壺の合い口に設けられた2ヶ所の溝を通して供給されるという、先のカンテラに近い簡易型の豆ランプです。これらは両方とも光量が小さく、従って熱量も小さいので、点火部と石油溜りが接近していても使用できたと思われます。また、煤の発生などはいとわれないという使用目的でもあったので、この様に簡易なバーナーの構造でも良かったのでしょう。

●おわりに

無尽燈のような巧妙な器具はあまり普及せず、庶民はあくまで簡易で経済的なものを専ら用いていたようで当館の収蔵資料からもその様子が良く窺えます。



▲（写真4）カンテラ



▲（写真5）コトボシ

子供とまつり

横山 浩子

ムラの暮らしの中で育まれてきた折々のまつりの中には、子供達が何らかの役割を受け持ってこれに参加していることが少なくない。

県下においても、大晦日のフクマルムカエ（註1）や小正月を中心としたトンド（註2）などの一連の正月行事、二月乃至三月の涅槃行事（註3）、春の靱播（註4）き時を中心に行なわれる水口祭に伴ってのヤッコミタバリ（註5）、初夏の奈良盆地の代表的な農耕儀礼である野神まつり、虫送り、印地打ち（註6）、火祭りをはじめとする盆行事に関わるもの、秋から冬にかけては十五夜（名月）や亥の子、十日夜、申まつりなどといった具合に、四季を通じてその節目の行事には子供のさまざまな活動を見出すことができるのである。

さて、これだけ行事が多岐に渡っているとはいえ、そこで果たされる子供の役目には、共通した要素を認めることができる。

まず、子供達にとっての重要な役割として、行事に必要な物資（作りものの材料など）や供物、金銭などの調達を行なうことが多く見られること、そのため、これを恵んでくれるように村内各戸を巡る、いわば勧進行為が伴うことが挙げられる。

子供の涅槃行事において代名詞のように使われている「ネハンの雀（「勧め」の戯語化）」「シャカシャンノカンゲ（釈迦さんの勧化）」といった言葉は、このことを端的に言い表わしているといえるだろう。

子供達が正月に祝儀をねだる「トシトリ」、三月節供の「ヒナアラシ」や七夕の「タナバタアラシ」などに類するもの、ヤッコミワタリなどまつりの供物のタバリ（賜り）行為は、もはや行事遂行の前段階としての準備作業とは見なされない点、前者とは異なったものであるが、これらの風習は、子供達が行事に際して各家々に来訪すること、これに各家が施しを行なうこと自体が、そのまつりの核心をなすべき重要な意味を持った行為であることを示す、一連のものとして捉えることができるのではないだろうか。

子供達が家々を巡るとき、さまざまな囃し言葉が伴うことが多い。ときにそれは言祝や呪誼の意味を含んでいる。またこれに、具体的な儀礼行為が加えられていることもある。

端午の節供や亥の子まつりのときに、菖蒲や新薬を使つて「デンボ」と呼ばれる苞状のものを作り、また、これを家の土間などに打ちつけて祝う「デンボ打ち」が行なわれるところがある。

そのとき「姉さん起きてるけ、寝るけ、新米薬（菖蒲デンボ）で祝たろけ」などと囃したてことは、よく知られている。

一体に、子供達のまつりには「暴れ」の要素が強いことが、しばしば指摘されている。

また平素では許されない、不道徳で礼儀をわきまえないような行為が公認される。

よく挙げられる例であるが「十五夜の団子盗み」のように「盗み」という反社会的行為がむしろ歓迎され、これをけしかける風さえ見られるのは象徴的である。

先の亥の子のデンボ突きでは、若い女性を追いかけて回してお尻をデンボでたたいたり、野卑な言葉で盛んに罵る。

また、桜井市高田の亥の子まつりはこれとは一風変わっているが、一名「暴れまつり」と呼ばれるほど乱暴なまつりとして知られており、お飯屋壊しや直会の席でお膳を蹴飛ばして暴れること、また濡らした薬束を御神体の前の燈明めがけて投げ付ける燈明消しなどの特色ある儀礼行為の連続で占められている。



▲菖蒲デンボ（大和郡山市西椎木）

このムラでは、大暴れすることは御神霊をなぐさめることで、万一これをしなければ、神の祟りがあると言い伝えられているという。

子供達は物を貰い歩きながら、例えばトンドの柴集めでは「一把か二把か……シブカカ放り出せ甘いカカもろてやれ」とか、ヤッコミタバリでは「ヤッコミくれんなドンガメ放そ」などと悪態をつく。

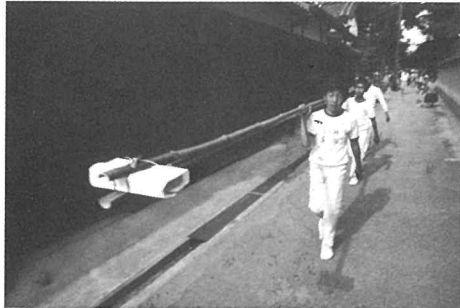
供物や祝儀などに不足があれば、散々なことになることがある。

野神まつりの一種である田原本町鍵の「蛇巻き」では、子供達が「ドサン箱」と称する、樺の木で作ったミニチュア農具を収めた箱を竹竿の先につけたものを携えて、その年に慶事のあった家々を祝って廻る風習があるのだが、もしこのとき祝儀が少なくいと稲藁と麦藁とを合わせて作った全長約10m、重さ約180kg余り（頭部は藁約350把が使われている）もある「蛇」を家の門口に放り出して困らせたものだという。

これらの言わば「公認されたいざら」も、もともとは、人々の安寧を確保すべき意味ある行為として、そのための特別の日にごそ容認されたものと言うことができよう。

古来から日本人が持ってきた伝統的な観念においては、子供はより神に近い存在として捉えられてきた、といわれる。

そして子供を神の依坐として呪言や呪事を行なわせることによって（ここでは充分例を挙げることができなかったが、これらのまつりには年占的な競争、対抗の要素も多く認められる）神意をうかがい、人々にふりかかるべき災厄を払い、その盛んな生命力によって新たな活力を与え、豊かな実りを約束する、といった役割を子供に託してきた先人の精神



▲ドサン箱を担ぐ少年（田原本町鍵）

生活の一端を、これらのまつりの中からも窺うことができよう。

註1) 大晦日夕刻のトンドなどの火祭り、もしくは元旦早朝の若水汲みに際して、「フクマルコイ」などと唱え、またフクマルを迎えるための所作をする。

現在伊賀地方から大和高原地域に集中して見られるが、もとは奈良盆地にも行なわれていた痕跡が認められるという。

フクマル迎えについては、林宏「フクマル迎え行事資料」（『近畿民俗』21号 昭32）、松崎憲三「フクマルムカエについて～その分布と行事の種々相」（『奈良県立民俗博物館研究紀要』3 昭54）等に詳しい報告・論考がある。これによればフクマルムカエは年の節目に際して行なわれる再生儀礼で、これによって招来される神は、新しい生命霊であるという。

註2) 子供組によって行なわれる涅槃行事は県内各地に点在するが、特に東部山間に於て顕著な分布が見られる。このような「子供涅槃」については、岩井宏美「大和東山中の子供涅槃について」（『日本民俗学会報』第31号 昭38）に詳しい。

註3) 水口祭に際して、その供物とされる焼米やキリコなどを子供達が袋を持って貰い歩く行事。

註4) 辻本好孝『和州祭礼記』（昭19）に「穴師・巻野内のねんりき行事」として報告例がある。

印地打はもと、平安末から中世にかけ、盛んに行なわれた石合戦で、のちに子供の遊戯ともなった。

五月節供、また正月にも行なわれ、そこには年占的な意味が込められていたともいう。

註5) 奈良市東部山間、五ヶ谷地区、天理市東部福住地区などに見られ、山の神まつりとしての色彩が濃い。

註6) 県内では大和郡山市西椎木などで野神まつりの一環として行なわれている。

註7) 前掲『和州祭礼記』

註8) 同上

1. 天川村老博労の話 (天川村沢原)

かつて十津川南端の果無峠を越えた時、桑畑の小字果無の村の家の牛小屋に大きな牛の飼われているのを見たことがある。

この村へ牛を連れて行くには国道からの急な細い坂道を小牛の時抱いて登ってやるか、往年の本街道であった西川にかかる柳本の渡を渡って登って行くかの二つしかないと思うが、牛が太ってきたら高い果無の村からは牛はもうそのままここで飼い殺しではないかと思った。

大峰連峯釈迦が岳へ登る起点の前鬼の里は5戸の鬼の子孫と言われる修験の家と他に数戸の加わった10戸内外の村で、この高山の中腹の村に案内田圃があり、そのためここにも牛が飼われていた。この村への道中の十津川村側の奥里の老人から子供の頃抱えられて連れて行かれた前鬼の牛を見たことがあるが、その牛はそこからもう出られなかったやろうと聞いたこともある。

こうした牛を求めて世話をするのはやはり博労で、その博労はどこから来るのだろうかと思うが、慶応2年十津川村神納川奥の村、内野に生れ明治22年十津川大洪水で24歳に北海道に移住した森秀太郎翁は渡島するまでには2回馬を見ただけだったと翁の『懐旧録 十津川移民』の中に興深く書いておられるが、その最初は11歳で川津村矢之原の西屋の正人が馬を曳いて通ったのを初めて見たが、正人は博労だったので馬を熊野で買って高野の方へ売りに行くところだったと記述しておられる。翁が11歳という明治9年のことであろうと思うが、この頃十津川村にも博労がいたのである。野迫川村の野川谷は高野豆腐の産地で大豆のオカラが多量に出来たが、十津川の瘦馬を買って来て豆類で太らせ他所へ売ったのである。この売買も博労の仕事だから吉野奥にも何人かの牛馬売買を職とする人がいたのである。

昭和53年8月天川村民俗調査に入村した折、沢原の今西竜造翁は博労をしておられたことがあると聞き、その月の23日翁を訪い、かねて関心を持っていた奥吉野の博労話を聞いた。翁は明治25年生、その時は86歳であった。翁のこの仕事は止めて既に20年も立っていたが、15年間程従事していたということであった。それ以前は沖金で旅館を営んだこともあるという。栃尾にも博労が居り、村へ入る他の博労も知っていて博労のことはよく分っていたのである。

商売には和歌山県有田郡清水町や大塔村猿谷へも行ったし宇陀郡の市にも出かけた。

但馬牛や種付牛などを村へ入れる時頼まれて見にも行った。

田耕用や肥料を取るために牛を飼ったので、村内には6、70頭もいたであろうか。洞川には馬も飼っており、これは洞川の村から山上ヶ岳の登り口まで、あるいは洞川から洞索と言われた索道の駅まで荷を運んだ。乗馬も何頭かいたが洞川で挽馬を業とするものはいない。材木は索道に載せて運んだが材が大きくて索道に載せられないものは車に載せ馬で挽いた。重くて挽けない時は馬2頭を付けて挽かせた。馬の背に荷を付けて小南峠は通らなかった。

牛の売買には北山方面まで行ったこともある。また小牛を生ませるため雌牛も扱った。

翁からも十津川の瘦牛を買い、野川谷で太らせると大阪方面へ売ったが自身は大阪へは行かなかったと聞いた。野川から淡路へ出かける人もいたが翁はここへも行かなかった。

大塔村坂本から十津川村旭近辺にかけ材木運搬のために馬を使うので商売があったし、黒滝村にも馬を飼っていてこのあたりの馬と交換した。

肥えた牛は扱わず、どこでも運搬出来るような体格のものや、若い牛しか扱わなかった。

牛は1人で2頭しか連れて行かれぬが、馬なら3頭は連れて行ける。3頭の真中の馬に

乗れば前後の分は曳いて行ける。

牛は歯を見てその年齢を調べる。乳歯は長く持たぬが2歳になると短い歯が生えかかる。4歳になると小さい歯は無くなり上下2枚ずつ大きい歯が見えてくる。そして老齢になると1枚になり、藁は食べにくくなり、奥歯で反芻する。

4、5歳にならぬと仕事出来る牛かどうかは分らぬ。肉を取る時3歳ではまだ肉は付かず、やはり4歳にならぬと取れぬ。使役牛は若いのがよいが、若くてもハジョウ（歯の性質）の悪いのはよろしくない。

種牛は県から借りてくる。

牛根性という言葉があるが、数多く扱っていると牛の性質は大体分る。

角の生え際に円い筋が現れるが、それによって牛の年齢が分る。

雌牛から子牛を取るのは3頭、多くて4頭、子牛が成長して親と放してもいけると思うと子を放す。その場合子が雄牛の場合は6、70日、雌牛の時には100日以上立たぬと放せない。子を残そうと思う時は子牛に十分乳を飲ませて育て親牛を放す。牛も筋を引きよい親からはよい子が育つ。天川村は牛の生産地になっていた。

馬からは子を取らぬ。大阪や和歌山でもそのように馬の産地から買ってくる。

荷を付ける馬はコンダ馬という。今高野山で馬車を扱っている人は親が博労であった。

牛の角の長いのはゆったりしており、短いのは気が短い。目付もまた違っている。角を見、歯を見ると牛の年齢は分る。

遠方の牛を購入するのはトラックを持って行き、購入すると載せて帰るが5頭より多くは積みぬ。持って帰った瘦せた牛でも一月も飼うと肥えてくるので土地でも売れる。

和歌山県の富貴は豆腐類で雌ばかり育てる処である。

牛の餌はこの辺では川合の豆腐屋の豆腐粕と糠で、萱もまぜる。牛の嫌うのはジュウヤク（どくだみ）である。冬になると藁と豆腐粕とを混ぜて与える。そして藁は水に漬けて柔らかくして食わせるがそれでも牛は肥える。

牛は親しむ人には荒い息使いをし、ねぶり

に來たりするが見知らぬ人が來て傍に立ったりすると警戒の様子をする。

翁は子供の時分から牛馬が好きだったので博労には適していると思うとおられた。

売買が成立すると当事者間で酒を飲むがこれをアキナイザケと言っている。

符牒は指1本がツン、これは1を表わして100円、2本は2を表わし2本の指を曲げると4、1本を曲げると9、拇指を出すで6万円を表わす。相手商売人ならこれを口で言うだけで分るが、素人なら着物の袖に手を入れて指を握ってやる。

牛の鼻輪はどんな木でも作れるが桧の枝を沸騰した湯に漬け、牛の鼻の孔に指を入れ指で鼻膜に穴をあけてやる。柔らかくて格別出血もしない。縄は角と耳との間に入れてやる。

戦時中村から17頭の馬が徴発せられた。ただ白馬と去勢していないのは徴発がなかった。徴発馬を使う兵士は決定していて連れて行くと自分の使う馬の性質を詳しく問うた。自分は馬に水を飲ませ真面目にやらないかねでと優しく言ってやった。

牛の色は黒か赤で朝鮮の牛であった。鳥取産の牛が多く、次は但馬産であった。

牛の2本の角の不整は直しくく年の経たのは尚さらである。ただ横へ広がらぬようにしてやる。牛の雌雄は角を見ても判る。角の曲っている牛はオイ縄を角に掛けても使える。角の細いのは雌に多く細角の親から生れる子の角も細い。

2. 旧高見村木津泉ヒデ姫聞書（東吉野村木津）

さて、筆者の聞いた中で暦年の最も古い方とはいうと昭和30年8月11日吉野郡高見村（現東吉野村）木津（こつ）でお目に懸った安政6年7月16日生（1859）の泉ヒデ姫であらうと思う。その折の聞書メモがあるので筆にしておきたい。

和歌山藩参観交代の道は紀ノ川に沿う街道を東に溯って華岡青洲の妻の実家名手の妹背家の本陣を経、橋本、越部と泊りを重ね、吉野川畔に聳える妹山を左に廻って川から離れて竜門郷の小名峠を越え旧高見村鷺家へ下り、東行して木津峠に出ると三角形に近い秀麗な

高見山の山容を真正面に見、山から離れてその西麓に散在する美しい木津の村を見下ろすことができる。

大和側で伊勢街道と呼ぶこの街道は往年の伊勢参宮道、大峯登山道、江戸と親藩和歌山を繋ぐ官道でもあった。97歳であった媼の話の中にも幼女期強く感じた幕末維新の慌ただしい話が多かった。

媼の若い頃は、行燈の火の周囲に集ってイトヨリ(糸撚り)をしたものである。ヨナベに10匁ずつの綿ひとにぎり持って糸を撚ったのである。

その頃阿波のツミヤといって阿波から糸撚りの道具を売りに来たものである。金属製の心棒に小さい車を挿したものである。聞いた話はよく理解出来なかったが、ツミヤはモジリとかオサとかを売りに来た。一幅は640スジあり、オサは320、ヤツモンメ640スジ、ナナツナカラは600スジ、框は16がヒトクミ、メモには同様なことを他にも書いていて当方には分らぬものの、読んだら分って下さる方もあろうかと思って少しだけ書いておく。

針を買っておいて(阿波のツミヤからであろう)一幅(ひとはば)木綿を織るのである。前から糸を撚っておいて田畑の秋仕事が終わると「今度は誰その着物をせんならん、はんちゃ(半纏)せんならんとて機を織ったのであった。「48へん手に掛けなモンメン(木綿)でけへん」と言われる程木綿織は手間のかかったものである。今でも娘を宇陀方面へ嫁入させる時は宇陀へ行くと百姓せんならんと言って木綿の着物を持って行かせるのである。紡績の糸が出廻るようになって糸撚りが助かった。

主婦は夏の暑い日中、田の草取りをし、ヨナベに子を負うて麦踏み(麦搗き)をし、冬は糸撚って年中着る着物を織った。オナゴに生れて木綿の横杼(ヨコヒ)渡さんものと、産後の御飯食べんものないと言われるほど木綿を織ったのである。

撚った糸は棒に掛けて鍋にのせて煮、それからそれを負いねて(背負って)宇陀や古市場へ染めてもらいに行く。木津から宇陀へは4里、古市場へは3里ある。縞にしようと思う

と水色なんぼ、紺なんぼと染めてもらう。藍は阿波からしか来ない。

ヨナベをする時の夜の時間はホッサン(星さま)やお月さんの加減を見て測った。ミツボッサン(オリオン)も目当てであった。

阿波のツミヤには

心中したげな狭山の池の

阿波のツミヤと初瀬女郎

というのはやり歌が歌われた。狭山の池というのは河内の狭山池のことであろうし、初瀬というのは長谷観音を祀る初瀬の町をさし、此処に働いていた飯盛女とツミヤとの心中話が語られたのであろうと思う。

他処に売りに行くものは何も無かった。昔の仕事もキーキリ(木切り、木材を切って売ること)であったが今ほども売れず、女も柴をしに山へ行った。そしてよく百姓もした。

材は藤蔓で繋ぎ筏にして流し和歌山へ出す。木津あたりは高見山から流れ出る高見川のほとりで、これがこのあたりの谷々の水を集めて下流で小川(おがわ)となり、国栖の新子で大台ヶ原を源流とする吉野川本流と合流して水量を多くし今は全く消えた流筏を盛大ならしめた。小川材は吉野林業の中でも優良材を産出したことで知られている。

山へ行って葛の根を掘りヨサリ(夜)ニワ(家の土間)でそれを叩いて叩いて桶で洗い出しキゴ(底に溜った澱粉)を取るのであるが、木津では葛はそうは採りに行かなかった。蕨は隣村平野あたりの人はずいぶん採った。これも根を掘り叩いて水に晒すとキゴが採れた。

栗の木は昔たんとあった。杉谷(隣村)には特に多かったがこの木は汽車が着いてスリッパ(枕木)として切られた。杉谷では栗の実の成る頃鑑札を売り、(入山許可証のことであろう。)木津の者はそれを買って拾いに行った。主人は1日行って四斗ぐらい拾った。杉谷の人はたとと拾うと俵に入れて水に漬けておいた。そして木津から拾いに来ると言って篝火を焚いて番をした。

栗の実の皮を剥き渋を取って水を入れた小さい桶に入れ板で漕ぐときれいな実となる。それを乾かしておいて御飯に入れたり、粥に

炊いたりする。

高見山を越えた伊勢領木柵あたりには生えているそうであるがこのあたりで柵の木は見たことはない。ホソの実も少ない。

このあたりは屋根を萱で葺いたクズヤ葺きが多かったがこの萱はヤケノ(焼野)へ採りに行った。所謂ユイで今年はトウドもらおうと言ってユイ仲間に萱を刈ってもらう。その時村の三役一庄屋、年寄、百姓代一は羽織、袴で焼野から帰って来る刈り手を迎えに行った。もちろん御馳走もする。(年寄、百姓代などいう言葉は各地で聞いた多くの老人方の口からは耳にできなかったものである。)

盆の16、17日あたりは盆踊の最高潮であったがサエモン(祭文)踊はなかった。

暮のトシゴエ祭りには紀州からずい分やって来た。恋野、隅田、荒川あたりからの参宮客が多勢通った。村の宿の井筒屋へ媼も手伝いに行ったが、紀州の道者(どうしゃ、媼は暮の参宮客にこういう言葉も使った。)はヨサリ(夜)もろくさま寝んと歩くとのことであった。

紀州からの女の足弱の参拝客の中には馬に櫓を付けた三宝荒神にし、中乗りと左右の計3人が乗って馬を美しく飾り馬子が歌うて参った。馬はたくさんいて井筒屋の前に馬繋ぎもあった。駕籠は全く無かった。

木津あたりからの参宮は伊勢だけなら5日かかり、二見や朝熊かけると6日になったという。菅笠をかぶり、草履のアトカケして歩いて行った。

媼は寺小屋へ学びに行き、住職から教えられたという。木津の者ばかり20人もいたであろうか。女の仲間が無く男の子にいじめられた。

いろは、一、二、三、村の名、いえな(苗字)、人名、郷名、国尽し、長く通っていると実語教や今川なども教えてくれた。女大学も習った。文は和尚さんが書いてくれた。1日中教わるが新入りと古参とは教わる内容が違った。

ホリケの娘は6年間も通い寺小屋頭であった。オッサン(和尚さん)の嫁さんになるのかと皆からからかわれるほどであった。

習字は教わったが算盤は教えてくれなかつ

た。オッサンはもろて食べるのやから算盤は要らんということであった。算盤の方は村の中によく出来る人がいたので教えてもらった。

媼の話の中で腑に落ちなかったのは、雨がいくら降ってもヒヨリガン(日和願)は出来ないから雨乞いはかけへん(雨乞はしない)ということであった。

平野の村では十三仏を祭り、お通夜の時棺の横にこの掛図を掛けて拝むなどとも言っておられた。

紀州さんのお通りはこわはした。(恐しかった。)お通りのある10日か半月ほど前、ハヤ(早飛脚)が書面を持って江戸へ行く。ヨーホーヨーホーと掛け声して夜と言わず昼と言わず通った。紀州の行列は馬でなく駕籠で行った。ちょっとのお通(小部隊)でも30人ほど、大きいと50人もいた。

驚家で泊ると伊勢の波瀬が中食になり帰国の時波瀬で泊ると驚家が中食になると言われたが驚家にも波瀬にも本陣があるのだからこれは一日行程で中食を取る半日行程ではないように考えるがはたして如何であろうか。驚家には日裏屋善七(辻四郎三郎)がサムライ宿(本陣の意ならん)であった。

行列は四枚肩(しまいがた。4人で担ぐ)で尻ツマげて(裾はしょって)長い駕籠昇棒でになった。警護の武士は袴を穿きキリソの草鞋を履き大きな髻(たぶさ)を結い駕籠の両側に付いて「下に下に」と通って行った。そして俯けと言った。村の番人が行列の先に立って下に下にと通ると皆家の蔭に下りた。

お姫さんの乗った駕籠には女子が両側に付き、漆を塗った薙刀や槍を袋に包みそれを絹製の房を付けた絹紐で巻き4、5人の者が持つて扈從する。行李も両掛(りょうがけ)も片荷ずつ棒で通して担って行く。

宿(しゆく)入りには行列をする。50人の一行では駕籠は5台か6台あり、駕籠に乗ったもの以外は陣笠を被って歩いて行く。

ハヤ(早飛脚、並飛脚)は昼間のみであるがこちらの方も夜間も走って通った。)は合羽で包んだ包みを棒に括って肩に掛け空いている方の手は拳を握って走って行った。夜間寝ていてもハヤが通ると親達は、また騒動起るかし

て(起るようだ)と言った。

ハヤは毎日とはならず、ハンケ(半期・半年)に一回ぐらいであった。

「浪人えろ居っておとろしはしたえ」(浪人が多勢いてうるさかったですよ) ということで

あった。そういう者に道で出合うとこわかった。彼等は古い衣服を着、シリツマゲ(尻端折り)して大小差すものもあり、一本差すものもいた。

民俗公園だより

水車小屋

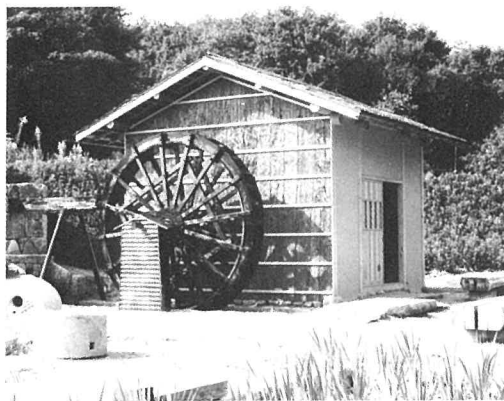
ムラとマチの生活のなかに、生態系の輪から外れることもなくしっくりと組み込まれてきた水車。マチの大工さん、鍛冶屋さんの手で作られた。ムラとせいぜいマチという地域のなかで完結する水車には都市という概念が必要でなかった。また、日常的で、全体が十分に知覚できるヒューマンスケールは我々に安心感を与えてくれる。しかも、そのパワーは昭和30年代までの経済基盤のうえでは十分に実用に耐えうるものであった。水しぶきをあげながら、グルグル廻る水車は迫力がある。ヒューマンスケールの技術が人間らしさを十分に実証してくれる。安堵感を与えてくれる。

一般的に“水車”と呼ばれるくるま状の水車が発達したのは、そんなに古くなく、急速に普及したのは明治以降といわれている。今も現役で働いているこのタイプの水車は、奈良県とその周辺では数例をかぞえるのみである。20年ぐらい前までは動いていたという。典型的な水車のイメージをもつこのタイプの水車は立地条件が限定される。水の位置エネルギーを利用するための高低差と、ある程度の水量が要求される。従って、その分布も吉野や金剛葛城山麓のような山裾に限られてくる。また、日常的な精米用以外の水車は、地域の特定の産業と結びついて発展した。桜井市の三輪地域の素麺、御所市の葛城山麓の製薬のごとく、これらの地域では水車があったという話や水車の歯車を作る大工さんがいた

という話をよく聞く。

動力のための水車は精米・製粉をはじめ、製薬や線香の製造など特殊な用途にまで広がられたが、平野部では利水のための揚水水車が多くみられた。動力を得るためではなく、低いところから高いところへ水を揚げる目的をもった水車である。ひと昔まえの重要な稲作生産用具で、平野部での田園風景を構成する要素の一つとして、本博物館でも数例を収集している。

クリーンエネルギーの代表ともいえる水車も、すでに過去のものとなっているが、水車のもつ詩的なイメージとロマンは現代に生きる人々の心象風景として今なお残っている。石油文明、原子力エネルギーにドップリと浸っている現代人に一陣の爽やかな風を送る水車小屋が民俗公園のしょうぶ園に完成しました。



▲大和民俗公園しょうぶ園に再現された水車

【表紙説明】

石油をひたした芯に点火する洋風の照明具。なんとといっても近代100年の間の照明具の変化は厳しい。明治初めごろから国産ランプが製造され、全国的に普及し従来の燈火用具は一変した。

【編集後記】

今年で奈良県100年目を迎えました。この間庶民のくらしぶりも大きく変化しました。「奥吉野の民俗採集報告」などを読んでいただければそのことがよくわかります。昔の話はあちこちで今でもきけます。よくきいておくことが必要なのです。